
宝彩瞑想会レジメ 宝彩有菜

「沼津」レジメ 2011/12/05

「瞑想と愛と祈り」



・瞑想の浄化3手順

「集中」、「気付き」、「棚上げ」

・愛と欲の8要素表

get, hold, compare, more love,leave,accept,enough

・イエスの瞑想

「愛と祈り」＝「愛」と「祈り」

・愛とは・・・与えること 無償の愛 give not get

・祈りとは・・・

「祈り」＝ 感謝 + 全任

・感謝とは・・・ありがとう 満ち足りていること 満足 enough not "more"

・全任とは・・・

「全任」＝ 大肯定 + 離執

大肯定とは・・・認める・受け容れる・全て完璧、accept not compare

離執とは・・・手放す・捨てる・忘れる・笑う、dorp,leave not hold,not attach

・つまり、愛と祈りとは、＝「愛」「離執(=leave,笑い)」「大肯定」「感謝」

get, hold, compare, more ←欲の4要素

love,leave,accept,enough ←愛の4要素

<教会の祈り>←イエスの祈りとは異なる。

http://en.wikisource.org/wiki/The_Lord%27s_Prayer

From Anglican Books of Common Prayer

From the English Book of Common Prayer,

Standard of 1662—still the official standard in England & Wales:

Our Father, which art in heaven,
Hallowed be thy name.
Thy kingdom come.
Thy will be done in earth
As it is in heaven.
Give us this day our daily bread.
And forgive us our trespasses,
As we forgive them that trespass against us.
And lead us not into temptation,
But deliver us from evil.
For thine is the kingdom,
The power, and the glory,
For ever and ever.
Amen.

プロテスタント 1880 年訳（文語）

天にまします我らの父よ
願わくは
み名をあげさせたまえ
み国を来たさせたまえ
み心の天に成る如く地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦す如く我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに遭わせず悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり
アーメン

(ウィキペディアより)

主の祈り(しゅのいのり)はキリスト教の代表的な祈禱文である。「主禱文」(しゅとうぶん)とも。日本ハリストス正教会では「天主經」(てんしゅけい、天主經)と呼ばれる。

キリスト教は、神への祈りを捧げる時に唱える様々な定型文(祈禱文)を持っている。どの文を正統な祈禱文と認めるかは教派によって異なり、またプロテスタントの一部には定型文としての祈禱をほとんど持たない教派もある。

その中で、主の祈りは唯一、イエス・キリストその人が「祈るときは……(中略)こう祈りなさい」と言って弟子たちに与えたとされる祈禱文である。イエスがこの祈禱文を弟子たちに教えるシーンが福音書(マタイによる福音書 6章 9節~13節、ルカによる福音書 11章 2節~4節)に書かれており、主だったキリスト教教派は主の祈りを正統な祈禱文として認めている。

(マタイの福音書)

だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。

御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。

わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

(ルカの福音書)

そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。

『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。

わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。

わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。

わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』

わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』

宝彩有菜：コメント

「眼には目を、歯には歯を」の世界で、そのアンチテーゼとは=「許す」こと。

単純に、それができないから、「神」を介在させる。

仕組み：

他人を許すこと=無償で許すことになる、それはできない。でも、=神から許しが来る(補償される)
(無償ではない)

つまり、許しも取引である。

モーゼの十戒（ネットより）

旧約聖書の出エジプト記 20 章 3 節から 17 節、申命記 5 章 7 節から 21 節に書かれてある。
エジプト出発の後にモーセがシナイ山より授かっていると記されている。

『出エジプト記』はエジプト脱出の物語に後から契約の内容と細かい規定が組み合わされて完成したと考えられている。

モーセ五書の配列で『出エジプト記』の次にあたるのは『レビ記』であるが、『レビ記』は全編が宗教的規定に関する書であるため、『出エジプト記』は内容的にはその次の『民数記』へ繋がっているといえる。

なお、22 章 18 にある「呪術を使う女はこれを生かしておいてはならない」という部分が『欽定訳聖書』では「魔女」(witch) と訳され、この『聖書』が広く読まれたことで、魔女狩りの『聖書』における根拠とみなされることになった。

●正教会・プロテスタント（ルーテル教会以外）の場合

- 1.主が唯一の神であること
- 2.偶像を作ってはならないこと（偶像崇拜の禁止）
- 3.神の名を徒らに取り上げてはならないこと
- 4.安息日を守ること
- 5.父母を敬うこと
- 6.殺人をしてはいけないこと（汝、殺す無かれ）
- 7.姦淫をしてはいけないこと
- 8.盗んではいけないこと
- 9.偽証してはいけないこと（嘘を言ってはならない）
- 10.隣人の家をむさぼってはいけないこと

1 から 4 までは神と人との関係であり、5 から 10 までは人と人に関する項目（同時に刑法の根幹）である。

ユダヤ教の安息日は土曜日であるが、キリスト教会ではイエスの復活の日である日曜日を主の日と呼び、日曜日を聖日として礼拝している。

●カトリック教会・ルーテル教会の場合

- 1.わたしのほかに神があってはならない。
- 2.あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
- 3.主の日を心にとどめ、これを聖とせよ。
- 4.あなたの父母を敬え。
- 5.殺してはならない。
- 6.姦淫してはならない。
- 7.盗んではならない。
- 8.隣人に関して偽証してはならない。

-
- 9.隣人の妻を欲してはならない。
10.隣人の財産を欲してはならない。
宝彩有菜：コメント十戒の必要性

小民族（ユダヤ民族）が、エジプトから脱出を図る

- ・同一化の必要性＝同じ意識、同じ目的、同じ考え方にまとまる必要がある
- ・最小コストによる規律の順守
規律とは＝行動する、しないの規律＝脱出行動（進む、休む）＝ 安息日の制定厳守
＝共同社会の

1.主が唯一の神であること

多神教だと、意見が分かれるため統一行動の指針になりにくいので、一神教となる。

2.偶像を作ってはならないこと（偶像崇拝の禁止）

偶像を作ると、持ち運びが不便であること。
指導者より、偶像を崇拝するようになること。
偶像が多数できると、指導意見が多数になると。
要するに、指導者の意見を最強にするため。

3.神の名を徒らに取り上げてはならないこと

指導者のみが、預言を預かることができることにしなければ、指導できない。

4.安息日を守ること

休みたい時に休むのであれば、統制ができない。休む日以外は、行動するということ。
勝手に休ませないということ。

（下記は、倫理、道徳、規律、法律＝つまり、社会安定の基本、保守的政策の基本）

- 5.父母を敬うこと
6.殺人をしてはいけないこと（汝、殺す無かれ）
7.姦淫をしてはいけないこと
8.盗んではいけないこと
9.偽証してはいけないこと（嘘を言ってはならない）
10.隣人の家をむさぼってはいけないこと

宝彩有菜：コメント

法律（刑法）にあたるもの。

これを、自分の民族に徹底するには、

- （1）強大な警察組織、司法組織が必要
- （2）ユダヤ民族の場合、それは、得られない状況（支配され故郷を追われている状態）

(3) 強力で怖い神様が、天から監視しているとして、民族を取り締まる方法。

従って、ユダヤの旧約聖書の神は、次の特徴がある。

- (1) いたって「怖い」
- (2) ユダヤ民族だけは、最後に救う。

モーゼの十戒ができたときに、神は、強力になった。

イエスは、ユダヤ民族が安定して、栄えていた時に登場。

従って、いたって「怖い」神様は必要なかった。

「神事」で民族を統括する方式に反対する流れがあり、それに同調していた。
また、本人が「悟った」ため、「神」とは、「子供だまし」だと分かった。
愛と祈りを説いた。瞑想も教えていた。

イエスに「神」と「神事」を否定されて、その勢力が大きくなりつつあったので、旧体制は危機感を持ち、抹殺した。

イエスの死後、パウロにより、イエスの教えは、教会組織になった。

パウロの戦略的解釈

- ・「いたって怖い神様」は、イエスが身代わりになってくれたので、民衆は許されたとした。
- ・ユダヤ民族以外にも、救われると、対象を広げた。
結果、世界的宗教に発展。

瞑想は、次第に忘れられた。(仏教における瞑想も同じように時代とともに忘れられた)

・その理由(途中で、瞑想のできない指導者が挟まると、そこで途絶えるのかもしれない)
組織が大きくなると、組織の地位を昇って行くのは、世俗的な欲が大きく、その才に秀でたものでなければならぬ。

しかし、瞑想の修行は、個人の個人の問題である。そして、瞑想ができると強欲がなくなる。
結果として、組織内で成り上がった指導者は、往々にして瞑想が出来ない人が、その地位につきやすいのかもしれない。

以上、「瞑想と愛と祈り」

イエスの言葉のなかから、瞑想の役に立つ言葉を探して解説しているもの：

「イエスとその弟子トマス」(「宝彩 BB マガジン」に連載中)

(15) イエスが言った、「もしあなたがたが女から産まれなかった者を見たら、平伏しなさい。(そして) 彼を拝みなさい。彼はあなたがたの父である」

これは、他に並行個所のない、アグラファ（飛び言葉）の一つです。いろいろに解釈できます。今回はトマス福音書を、瞑想の教科書と見えていますから、この言明も、その立場から解釈し説明したいと思います。

「もしあなたがたが女から産まれなかった者を見たら」とイエスは言っています。人間は誰でも、100%女性から産まれます。例外はありません。もし、そのような人が居たら、それは、「父」、すなわち、この文脈から言うと「神」でしょうが、その「神」であるということのようです。

イエスは、マリアという母親から産まれています。これは弟子達も知っています。ですから、「女から産まれなかった者」には該当しません。女から産まれています。ですから、イエスは「神」ではありません。

瞑想を深くして、究極まで到達すると、「神」とは人間のマインドが想像して作り上げたものだとわかります。ですから、「神」は概念としてはマインドの中に存在しますが、現実には存在しません。瞑想の先生も、しかし時には神の話をして。たとえば「それは神様に守られているのです」とか「神に祈って棚上げしなさい」とか、「神」という言葉を使います。しかし、それは方便です。人間がいくら考えても分からないことなどを、「神に任せて」考えないようにしましょうという使い方などをするための方便です。

イエスは、当時のユダヤ教の環境で生まれ育ったのですから、「神」は居ると教えられていたでしょうし、そのように思って成長したかもしれません。しかし、一旦、悟ると、これは誰がどのような状況下で悟っても同じことですが、「神はマインドの産物」だとはっきり分かりますから、たぶん、「神なんてどこにもいないよ」くらいは、ごく親密なトマス等の弟子には言っていたのではないかと思います。

「そんなことをおっしゃっても、イエス様。神様は居らっしゃるのでしょうか」

「何を言っているんだい。トマス。神様というのは、マインドが考えだした概念だよ。どこにも居ない。ファンタジーだ。夢想だ。作り話だ。フィクションだ」

「ええ、でも、でも、聖書にも書いてあるし、イエス様は、トマスには神様のように思えますが・・・」

「いいかい、トマス。もしトマスが女から産まれなかった者をどこかで見付けたら、そしたら、平伏しなさい。彼を拝みなさい。彼はきっと、神なのだろう。もしも、万一そんな人が居たらね。でも、そんな人が居る訳がない。そうだろ、100%居ないね。あはははは」

「そうですか？ つまり、神は居ない。でも、やっぱり神様のように思えますけど」

「では、勝手に思ってください。それもトマスの自由だ（笑）」

「はい、イエスさま」

「笑雲先生」

「なんだい、トマス。もとえ、小松茸」

「そうすると、パリサイ人を非難したどころじゃないですね」

「なにが？」

「旧約聖書の全体構造を根本的に否定していることになりますね。神は概念だなんて」
「そうだね。ユダヤ教自体の存立が危うくなる」
「ユダヤ教の教会や指導者は困りますね」
「そうだね。教会や指導者だけでなく、ユダヤ教を信じている人も困ることになるね」
「なるほど。それは危険ですね」
「そうだね。例えばインドや昔のギリシャ等、多神教のところでイエスが同じことを言っても全然危険ではないけどね」
「なぜですか？」
「多神教の神々は、みな、フィクションだと、多くの人々は思っている。想像だ。作り話だと。だから、滑稽な神様や、ダサイ神様や、新入りの神様など、みんな混在して居る。酒癖の悪い神様さえもいる。もともと、賤や脅しを利かすために居るわけではない」
「そうですね。神話、物語ですね」
「そうだ。だが、一神教の下で、『神』は概念だなどと言うのは危険なことだ。とても危険だ。社会のタガ（箍）を外してしまうことになる」
「なるほど。とても、危険。なるほど。そういうことですか。危険極まりないことですね」
「そうだね」
